

『メリー・ポピンズ』（原題: *Mary Poppins*）は、『メアリー・ポピンズ』を原作とする1964年に製作されたウォルト・ディズニー・カンパニー製作のミュージカル映画である。映画初主演のジュリー・アンドリュースがメリー・ポピンズ役を務めた。実写とアニメーションの合成という手法が取られ、第37回アカデミー賞では最多13部門にノミネートされ5部門を受賞した。

ストーリー

1910年。ロンドンの桜通りに住むジョージ・バンクス氏は厳格で気難しい銀行家。妻のウィニフレッドも女性参政権運動に夢中で、子供は全てナニー（乳母、教育係）任せだった。二人の子供である、姉のジェーンと弟のマイケルは悪戯好きで、ナニーがすぐに辞めてしまっていた。

新しいナニーを募集しようと広告の文章を考えているバンクス氏に、子供たちは「優しく、美しく、親切でおもしろいナニー希望」の広告を書いて見せるが、父は子供たちの意見を汲むどころか、その紙を暖炉に放りこんでしまった。

しかし、ジェーンとマイケルの広告は煙突から空高く飛んで、雲の上のメリー・ポピンズのもとに届いた。翌朝、バンクス氏の出した広告を見て集まった応募者達がバンクス家の玄関の前に並んでいると突然風が強くなり、応募者はみな吹き飛ばされてしまう。あっけにとられる子供達をよそに、傘を差したメリー・ポピンズが空から舞い降りてくる。

メリーは自己紹介もほどほどに子供部屋へ行き、指をぱちんと鳴らすと散らかった部屋が魔法のように片づき、絨毯で出来た不思議な鞆からは大きなものでも何でも出す。厳しいが魅力的なメリーと子供たちはすぐに仲良くなった。散歩のときには大道芸人パートの描く絵の中に入って遊び、メリーゴーランドの馬に乗ってキツネを狩りから守ったり、競馬に飛び入り参加したり、笑いが止まらないせいで宙に浮かんだ叔父さんと一緒に浮かんでしまったりなど、子供達はメリーと一緒に不思議で楽しい体験をしていく。

メリーがやって来てからは家中が明るくなり、いつも不機嫌だったハウスキーパーやコックが歌まで歌いだしたのがバンクス氏は訝しく、不愉快でたまらない。メリーを譴責しようとして逆に丸め込まれたバンクス氏は、それならばと子供たちに自分の働く姿を見せ、改めて厳格にしつけようと考えた。

寺院で貧しい老婆が売る鳩の餌に小遣いの2ペンスを使おうとする子供達を、バンクス氏は「そんな下らぬ無駄遣いをしてはならん」と叱り、自分の勤める銀行へ連れて行く。銀行の老頭取はマイケルの2ペンスを取り上げて無理に預金をさせようとしたので、子供たちは思わず「私のお金を返して!」と大声を出した。それを聞いた預金者たちは銀行が破綻したのではと勘違いし、あわてて払い戻しに殺到、取り付け騒ぎで銀行は大混乱に陥った。

逃げ出した子供達は道に迷ったが、さいわい煙突掃除夫姿のパートに出会った。パートは「お父さんは酷い人ではなく、銀行という檻の中で誰も頼る人がいない、ひとりぼっちで可哀想な人なんだよ」と子供たちに教える。パートがバンクス氏宅まで子供達を送り届けると、バンクス夫人はパートに自宅の煙突掃除と子守を無理矢理に頼みこんで出かけてしまう。子供達はメリー・パートと一緒に煙突を通過して屋上に吸い上げられ、地上では見られない夕暮れの美しいロンドンを体験する。すると、あちこちからパートの友達煙突掃除夫達が現れて、一行は屋上からバンクス宅の中まで、上を下へと煤だらけになりながら盛大に歌い踊りつづけた。そこへ帰宅したバンクス氏は事態に呆れ怒るが、その時銀行の老頭取から呼び出しの電話がかかってくる。クビを覚悟して落ち込むバンクス氏に、パートは「子供に愛情を注げるのは今のうちだけなんですよ」と諭す。子供達は「私たちのせいでごめんなさい」とバンクス氏に謝り、せめてもと小遣いの2ペンスを渡す。バンクス氏は子供達に「ありがとう」とお礼を述べた。

出頭した銀行で、やはりバンクス氏は取り付け騒ぎを引き起こしたかどでクビを宣告される。しかしそのときになってバンクス氏はメリー・ポピンズの魔法の言葉「スーパーカリフラジリスティックエクスピアリドーシャス」

(長大語)を思い出して笑い出し、老頭取にジョークを教え、クビになったことなど気にも留めず楽しそうに銀行から去って行き、そのまま行方不明になってしまう。

本当に大切なものは仕事ではなく、家族・子供たちだったことに気づいたバンクス氏は朗らかに翌朝家に戻り、一家は揃って凧揚げに出かける。公園では老頭取の息子重役達も凧揚げをしていた。彼らによれば、老頭取はバンクス氏が教えたジョークのおかげで心から大笑いしながら、実に幸せに亡くなったというのだ。重役たちはバンクス氏を銀行に復職させることを告げ、一同はみんなで歌いながら凧揚げを楽しむ。

あれだけメリーに懐いていた子供たちも、やはり本当の父と母が一番だった。自分の役目は終わったと感じたメリーは、次の子供たちのために旅立つことを決意する。

凧を売るパートに「さよならメリー・ポピンズ、またすぐ帰ってきておくれ」と見送られながら、メリー・ポピンズは風に乗れ、空に舞い上がって行った。

登場人物

主人公

メリー・ポピンズ

魔法が使える、美人で賢く優しいスーパーナニー(乳母の事、ベビーシッターとは若干ニュアンスが異なる)。普段は雲の上で暮らしている。靴の中にはたくさんの道具が詰まっており、明らかに入らない大きなサイズの物まで入っている。ジェーンとマイケルの書いたナニー募集の広告を見て、ジョージの厳格な条件を見て集まってきたナニー達を魔法で追い払ってバンクス家にやって来た。ジェーンとマイケルに見せた魔法についてはぐらかす言動が多く、自分を実の親以上に慕うジェーンとマイケルに突き放した態度を取る。しかし、本心では子供たちを愛しており、子供たちの実の親には叶わないと距離を置かざるを得ず、やがては別れなければならない事を悲しんでいた。

パート

メリーの昔からの親友で、快活な性格で屈託のない好青年。よく間違えられるがメリーの恋人ではない。歌も上手ければダンスも上手く、何でもこなす大道芸人。煙突掃除屋をはじめ、ストリートミュージシャン、絵描き、凧売りなど日によっていつも違う仕事をしている。昔は気難しく笑わない子供で両親にもよく思われていなかったらしいが、メリーの呪文を聞いて何も怖いものがなくなり、今のような性格に変わったらしい。

バンクス家の人々

ジョージ・バンクス

銀行に勤める厳格なお父さん。全てきっちりとしなければ気がすまず、メリーを快く思っていなかった。

ウィニフレッド・バンクス

ジョージの妻で、ジェーンとマイケルのお母さん。夫と違ってメリーには肯定的だが、女性の選挙権を主張する運動に夢中で、子供たちのことはいつもナニーに任せっきり。

ジェーン・カロライン・バンクス

バンクス家の長女でマイケルの姉。楽天的な性格で、部屋の片付けが苦手。

マイケル・バンクス

バンクス家の長男でジェーンの弟。少し頑固で気難しい性格。子役のマシュウ・ガーバーはジョージ役のデヴィッド・トムリンソンに似ている事から起用された。

エレン

バンクス家の家政婦。貧乏くじを引かされることが多く、不思議な現象を起こすメリーにも驚かされっぱなし。

ブルル

バンクス家のコック。エレンとは犬猿の仲で、いつも口げんかばかりしている。